

TAKE FREE

2024
Autumn

あっ LOOK *Yorii*

寄居を見て、歩く まちなか情報誌

あっ LOOK は、寄居町が発行するまちなか情報誌です。
寄居を歩き、町を見て、皆さんのお気に入りを見つけてください。

CONTENTS

P2.3 寄居の紅葉 P4 寄居みかん P5 日本の里風布館
P6.7 Pick Up! 地域おこし協力隊 P8 聴かせて! Yotteco 利用者の声

秋の
雀宮

幻想的に輝く

No. 6

寄居みかん

晴れた天気と完熟前のみかんが青いこの9月中旬ごろ、緑豊かな2つのみかん山を訪れました。ここ風布地区と小林地区の山々にはみかん園が数多く軒を連ねており、以前はみかん栽培の北限とまでいわれていたほど。みかん栽培の歴史は、天正年間までさかのぼり、北条氏が小田原から移植したのが始まりといわれています。風布・小林地区では、地形が織りなす低い場所よりも高い場所のほうが暖かいという盆地特有の逆転現象を活かした栽培が行われており、昔ながらの甘酸っぱさが特徴です。みかんシーズンになると里山ではみかん狩りを楽しむ声があちらこちらで聞こえてきます。今回は、各地区のみかん園を代表するお二人の組合長を取材し、話をお聞きしました。

寄居みかん狩り

日程	12月中旬まで(作柄により前後します)
入園料	800円(園内試食自由、おみやげ付き)
問合せ	たちばな園 ☎048-581-4977
	みはらし園 ☎048-581-5334
	寄居町観光協会 ☎048-581-3012
	寄居町プロモーション戦略課 ☎048-581-2121



好きじゃないと、
続けられません。
これはスポーツと同じ。



小林みかん山組合長
みはらし園
田島 博さん

山の上部に位置する「みはらし園」はその名のとおり、町なみや山の景色が遠くまでよく見えます。小林みかん山の組合長になって約15年になるという田島博さんは「以前は民間に就職していましたが、24年ほど前に退職し、父がやっていたみかん園に専念するようになりました」と語ります。敷地の奥へ進むと、築140年以上の母屋があり、さまざまな小物が置いてあるなど、長い歴史を感じます。縁側に座り、室内には過去に新聞や雑誌、広報よりい等に掲載された記事を切り取って、きれいに飾ってあるのが見えました。



小林地区では、12月上旬に来園者が多く、秩父鉄道「波久礼駅」や「野上駅(長瀬町)」からハイキングで訪れる客も多く、関東首都圏一帯のほか、日本在住のネパール人やロシア人、フランス人などもよく来るといいます。「コーヒーやお茶を無料で提供していますが、あるとき外国人が『コーヒーのミルクがない』というので、いつでも来てもいいようにミルクを買っておいたこともあります」と配慮も欠かしません。みかん栽培は、一年を通じて手間がかかり、特に広大なみかん畑を管理するうえで、除草剤は使わず、草刈りを年数日に分けて行っているとのこと。「好きじゃないと、続けられません。これはスポーツと同じです」と話します。これは幼いころから始めた長距離走とつながっているとのこと。

「当園では、観光みかん園としてのみかん狩りに特化しているため、農薬の散布は年2回程度です」。

これは、箱詰め販売を想定しているみかん園の農薬の平均(年4、5回)と比べると少ない回数であり、これは「みかん狩り」に力を入れているみかん園ならではの試みです。

山の斜面には、念入りに手入れされたみかん畑が広がっています。田島さんは「草刈りを行い『きれいになったな』と思ったときが一番の幸せです」と笑顔を見せます。みかん狩りのオープンに向けて、着々と準備が進められます。今年のみかん狩りのオープンは日曜日。大勢の来園が予想されます。秋晴れの中、気持ちよい風を感じる縁側で、みかんの話だけでなく、さまざまな思い出をたくさんお聞かせいただきました。

各みかん園では、
おいしいみかんを作ろうと
精いっぱい手間暇と
愛情を込めています。
ぜひ、お越しく下さい。



風布みかん山組合長
たちばな園
坂本 勝己さん

昭和27年(1952)ごろ、最初のみかん組合が設立され、その頃から組合員になり、みかん栽培を始めた「たちばな園」。祖父の代からの経営を継いで三代目となる坂本勝己さんは「敷地の畑は、元々桑畑であったため、みかんの木を植えてもすぐ枯れてしまうのが悩みで、植えることができても木が大きくなりませんでした」と当時の苦労を振り返ります。そこから、労力を重ね、試行錯誤を繰り返して、現在のかたちになったといいます。「みかんシーズンになると町内小学校や企業、バスツアーによる団体客の受け入れやみかんの大量の注文依頼を受けます。そういった場合は、各みかん園の受け入れ可能人数やみかんのなり具合等を常に把握しています」。

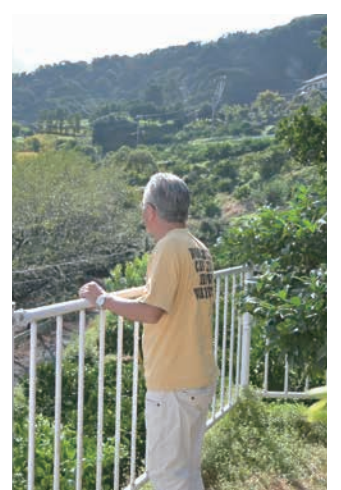
風布には12のみかん園が存在しているため、各みかん園と調整し、振り分ける作業も組合長ならではの大変さがあり、また、みかん栽培は、3月ごろから消毒や剪定、草刈り、追肥などを一年中欠かせません。雨の降り具合やその年の気温によって、みかんのなり具合が左右されるともいいます。「各みかん園では、おいしいみかんを作ろうと精いっぱい手間暇と愛情を込めています。ぜひお越しく下さい」。

たちばな園でみかん狩りをすると、手作りのこんにやくやお茶などのサービスがあります。コロナ禍以前は多くのみかん園でよくある光景でしたが、コロナ禍を機にこんにやくやお茶などのサービスの提供は減りました。「『うちの園もやめようか』と話しましたが、妻が『これを目当てに来るお客さんもいるから』と、現在でも続けています」。

この取材をしている最中にもフルーツを提供していただくなど、提供するだけでも手間暇がかかるものですが、このお客様に対するたちばな園のおもてなしの“想い”を強く感じました。

ご自宅の西側に広がるみかん畑に行くと、大小さまざまなみかんがあり、どれを食べようか迷ってしまいます。そこで、おいしいみかんの見分け方を聞いてみると「触った感触が柔らかく、小ぶりなものがおいしい」とのこと。そして、みかんが一番おいしくなる時期は、寒さが増した11月中旬頃とのこと。「昔は甘味より酸味が強かったが、地球温暖化の影響により、今はおいしくなりました」。

その甘酸っぱさを求めて、県内はもちろん、首都圏一帯、遠く関西など、大勢の観光客が来るといいます。「やっぱりお客さんに『おいしいみかんだね』と言われたときが一番のやりがいです」と笑顔で話してくれました。





やまと
ふうぶかかん
**日本の里
風布館**

日本の里風布館では、地元でとれた野菜等を使用した飲食の提供や自然の景色を生かした川遊び、バーベキューなどを楽しむことができる施設です。秋の紅葉やみかん狩りシーズンを迎え、大勢の観光客が里山に訪れています。

風布館のドアを開け、中に入ると「こんにちは。いらっしやいませ！」と明るく出迎えてくれた方は、見上げるほどの高身長とどっしりとした体つき。館長・田島さん。こちらのインタビュにも気さくに応えてくれました。

やまと
ふうぶかかん
日本の里 風布館
●寄居町大字風布 74

時-間 午前9時～午後5時
定休日 水曜日・年末年始・冬季一部休館
アクセス 秩父鉄道「波久礼駅」から
徒歩約40分

問合せ ☎048-581-5341
指定管理者 アイル・コーポレーション株式会社

「 PROFILE 日本の里風布館 館長 Tajima Kunio 田島 國士さん 」



令和5年から日本の里風布館で館長を務めている田島さん。レストハウスの運営や草刈りなどの景観整備、最近では寄居駅南口駅前拠点施設「Yotteco」を含む関係各所に飲食の提供をするなど大忙しです。

風布館の人気メニューは何と「より天うどん」と「より天そば」。日本水を使った手打ちうどん・そばと地元野菜を使ってサクッと揚げた天ぷらが特徴で、お腹いっぱいになるセットです。「麺がおいしく、コシがあるように作るには粉と水の絶妙な配分が重要なので、いつも気を使っ

日本の里風布館の
Instagram
アイコン

Instagram

て手間暇かけてこねています」。

そのほかにもさまざまなメニューを提供しており「実は手打ちで、かすうどん」を提供しているのは埼玉でうちだけなんですよ」と、笑いながら話す田島さん。また、メニューは季節ごとに少しずつ変えているとのこと。「お客さんが飽きないよう、『食べたい』と思ってもらえるような、おいしいものを作ることを心がけています」。

日常の業務に加えて、熱心にメニュー開発する姿に頭が上がりません。また、日本の里の秋の楽しみ方について「日本の里は自然に囲まれているため、紅葉がとてもきれいに見え、クルミやみかんを採ることができます。景観が美しいのでハイカーたちもよく訪れて、レストハウスで飲食を楽しむ方も多くなります。ここは波久礼駅や風のみちハイキングコースから来られる方が多く、ほかには野上駅から塞神峠を越えてくるなど、低山登山にはぴったりの場所です」と語ります。

こちらのインタビューにテンポよく応えてくれる田島さんは、風布館のInstagramも随時更新しています。そのアイコンについて気になったので伺ってみると「インスタのアイコンはひらがなで風布(ふうぶ)の文字が入っています。僕はバスケットボールをやっていたので、バスケットボールのロゴ(ふうぶ)と風布が一緒の読み方をするため、愛着が沸く家紋みたい

最後に田島さんは「僕はこのことを、子どもたちの心に残る場所にしたいです。子どもへの思いは大人になってもずっと残っているものです。大人になってまた来たいと思ってもらえる場所を残したいんです。50年後、100年後は自分たちではなく、子どもたちがこの景色をつくってくれます。そういう取り組みを継続して、みんなが来てくれるような取り組みを引き続き行っていきたいと思います」と力強く語ってくれました。子どもたちを中心に、心に残る、戻れる場所を作りたいという熱い気持ちを持つ田島さん。今日も明るい声が里山に響き渡ります。

より天そば 1,400円

かすうどん 900円

日本水 コーヒー 500円



地域おこし協力隊



地域おこし協力隊 Instagram

地域おこし協力隊とは、都市地域から過疎地域等の条件不利地域に住民票を異動し、一定期間、地域に居住して地域ブランドや地場産品の開発、PRや移住・定住支援などの地域協力活動を行いながら、その地域への定住を図る取り組みのことで、

町では「埼玉県版地域おこし協力隊」の制度を活用し、令和2年7月から地域おこし協力隊事業を開始しました。

今回は、令和5年に着任し、1年以上経過した現在の地域おこし協力隊のお2人をインタビュー形式でご紹介します。



松本 哲明 Matsumoto Tetsuaki
1975年、神奈川県鎌倉市生まれ。令和5年4月から寄居町地域おこし協力隊に着任。ミッションは移住支援、創業支援、空き家・空き店舗活用促進。地元・北鎌倉との2拠点で活動をしている。



「空き家・空き店舗Re活用!!プロジェクト」チラシ

■地域おこし協力隊に応募したきっかけは何でしたか？

そもそも、移住を考えるようになったのは2016年頃です。あるカフェで「半農半X」という言葉を知ったことが始まりでした。当時は会社員で、經理の仕事をしていましたが、いろいろと限界を感じていました。もっと自分らしい生き方、働き方ができないだろうかと模索していったんです。そんなタイミングだったので、この言葉に可能性を感じて、それを目指すようになりました。

その一方で協力隊になることは考えていませんでした。自分が「暮らしたい」と思える地域を選ぶことを優先したかったんです。そこに、必ずしも協力隊の枠があるとは限りませんが、そんな中で、昨年(2023年)の2月ごろだったと思います。友人から、今の僕の前任者にあたる方を紹介されたのが始まりでした。

■寄居町の印象はいかがですか？

寄居町は、僕にとって掘り出し物みたいなものなんです。移住先の条件として挙げたもの、例えば水が美味しいといったものから、街の空気感といった感覚的なものまで考えていました。それと、移住に向けて試行錯誤を重ねてくる中で、次第に「移住後は、僕も移住のサポートをしたい」と考えるようになっていったんです。ボランティアでもいいからって。僕の前任者に当たる大田さんを紹介されたのは、そんな折でした。移住支援って、どんな活動なのか知りたくて彼女を訪ねたのが初めての寄居町でした。その日は、移住支援の話聞きながら、町内を案内してもらえたので、僕も考えていた条件がそろっていることに気付きます。さらに、彼女の任期がもうすぐ終わり、次の担い手を募集しているという話もあったんです。移住先の条件が揃っている上に、移住支援が仕事としてできるかもしれない。これは、つかみに行かない理由が無いですよ(笑)。それで応募させていただきました。

■主な活動内容を教えてください。

僕の活動範囲は広めなんです。移住支援、創業支援、町内の空き家・空き店舗の利活用促進というトピックがあります。幅が広くて大変ですが、相乗効果もあるので面白みもあります。

■では、それぞれの活動内容について簡単に。まずは移住支援から。

「移住ガイド」という、その方のニーズに合わせて、町を案内したり、これからの進め方を一緒に考えたりする、個別相談会のような活動を軸に、移住イベントを企画したりしています。僕は「寄居町で暮らせて幸せ」という人を増やしたいと考えています。そのため、最終的には寄居町でなくても構わないから、その方にとってピッタリの移住ができるサポートを心がけています。僕の立場でこんなことを言ったら怒られるかもしれませんが、これが現実的だとも思っています。数を稼ぐために、ミスマッチを押しつけて移住してもらっても、誰も幸せになりませんから。隣近所に、イヤイヤ住んでる人が増えるとか、誰もうれしくありませんよ。

■創業支援について伺います。

例えば小さくてもいいので、自分の中の「やりたい」と思えることに挑戦したい。そんな方を応援したいと考えています。例えば企業などで働きながら、自分の特技や経験を生かした事業活動を掛け合わせる、という形で良いですし、その比率も、ご自身の個性や状況に合わせて、自分らしくデザインすればいいです。その意味で、スモールビジネスにチャレンジしたい方のサポートをしたいです。今後は勉強会なんか企画したいですね。

■空き家・空き店舗の利活用促進についてもお願いします。

「空き家・空き店舗 Re 活用!!プロジェクト」を立ち上げ、空き家・空き店舗の発掘に力を入れています。一番、面白みを感じているのは、不動産屋さんには解決できない領域の空き家問題に取り組みすることですね。例えば、処分することも無いけれど、住む予定も無い、みたいな物件が扱えることです。家主さんのニーズや、物件の特性を活かせるようにしています。移住希望者などに活用してもらえそうなマッチングもします。移住希望者も、まだまだ活用できる物件がほとんど無いのが実情です。

■今後のキャリアや人生設計は、移住を経てどうなりましたか？

協力隊卒業後も寄居町に住み続けたいと考えています。今年から、農業委員会のお力添えで畑をお借りすることができ、半農半Xの夢も実現できました。まだまだ、これからですけど、地域の皆さんが力を貸してください。これが本当によろしくて、何かしらの形で恩返しできたらと思うようになっています。移住支援の活動も何らかの形で続けるつもりです。

■内川隊員は、どんな方ですか？

賢い青年だなど常々思っています。書道という伝統ある文化を担う家系に生まれて、本人もその道を歩んでいきたい。そのせいか、若者らしい要素を持ちながら、伝統的な文化の匂いもするという、ハイブリッドな感性を持っているのがユニークですね。この感性から、どんなものがこの寄居町で育まれていくのが楽しみです。



移住希望者ガイド

内川 雄生 Uchikawa Yuki

2001年、東京都板橋区生まれ。令和5年8月から寄居町地域おこし協力隊に着任。ミッションは魅力向上・集客促進。書家三代目、現代書道家として活動している。



ワークショップ「音を、書く」チラシ



■なぜ協力隊に応募したのですか？

将来の進路や人生設計を考える中で、アーティストとして社会的にどう貢献できるかを模索していたところ、地域おこし協力隊という制度を知り、協力隊の活動が自分の目指す道と重なるのではないかと思い応募しました。

■なぜ寄居町を選んだのですか？

寄居町との出会いは本当に「縁」ですね。もともと埼玉の田舎に母と祖母と一緒に移住を考えていたところ偶然寄居町に辿り着きました。きっかけは先に着任していた松本隊員に誘われたことですが、豊かな自然環境と個を大切にす町民性に惹かれて、この地での活動を決定しました。都会の喧騒を離れ、静かな環境で作品制作に集中できるという点もとても魅力的でした。

■現在の業務内容について教えてください。

私の主な業務は「魅力向上・集客促進」です。具体的には、寄居町の魅力を発信するための活動を行っています。地域の歴史や文化、自然の美しさを主観的・客観的な視点から紹介し、町内外の方々に知ってもらうために視察とSNSでの活動をしています。また、アートを通じた地域交流の場を設けるため、ワークショップや展示会などのイベントも企画・運営しています。

■寄居町の魅力とは何ですか？

寄居町の魅力は、やはり自然環境ですね。寄居町は山や川、田畑といった自然要素が豊富で、関東平野へと移り変わる狭間の雄大な土地が特徴です。その自然の中で、のんびりとした生活を楽しめるところが素晴らしいと思います。都会から自然に囲まれた生活を求める方にとっては、適度に利便性が高く理想的な場所だと感じます。

■内川隊員について教えてください。

私は、東京都板橋区で書道教室を営む家に生まれ育ちました。現在は、現代書道家として書道と建築を融合させた作品を制作し、発表しています。書道の伝統性を守りつつ、新しい表現方法を追求することで、現代における書道の発展の一助となれればと考えています。その活動経験から、寄居町の文化や歴史、自然の魅力をアートを通じて別の次の形につなげられればと、取り組んでいます。

■協力隊としての目標は何ですか？

協力隊活動期間中の目標は、寄居町の豊かな自然を活用したアートイベントを実施し、地域の方や参加される方に楽しんでもらうことです。短期的には、地域の方との連携を深め活動拠点を探しつつ、寄居町の特徴を

アートによって発信していこうと考えています。長期的には、寄居町の潜在的な芸術文化を発展させ、地域全体を活性化させることを目指したいと考えています。

■協力隊卒業後の展望は？

協力隊を卒業した後は、アートの伝統的な側面と革新的な側面を両立させるべく引き続き作家活動に励む所存です。また、次世代のアーティストを育てるための環境を整え、自由に創作活動を行える場を提供していきたいと思っています。アートが日常生活の一部となり、生活がより豊かで楽しいものになるような社会を目指せばいいなと考えています。

■寄居町でおすすめのスポットは？

玉淀河原と風布です。玉淀河原は市街地から徒歩で行けるスポットで、河岸段丘から見下ろせる荒川は名勝地として知られています。そのまま足を運べる「雀宮公園」も四季の移りを感じられる落ち着いた場所です。風布は寄居町きつての観光名所で、川遊びから紅葉ライトアップ、みかん狩りなど通年楽しめるイベントがあります。まだ来られたことのない方はぜひ一度、検討してみてくださいいかがでしょうか。また、寄居町にはまだ知られていないすてきな場所がたくさんありますので、ぜひ自分だけのお気に入りの場所を見つけてみてください！

■どんな人に寄居町は向いていますか？

都会の生活に疲れてしまった方には、寄居町のゆったりとした気候環境やのんびりした町民性が合うと思います。自然に囲まれた環境で、自分のペースで生活することができるので、心身ともにリフレッシュできます。無理をせず自分の時間を大切にしながら暮らせる場所だと、家で作品制作をしていて強く感じます。

■田舎暮らしの大変な点は何ですか？

田舎暮らしで大変なことのひとつは、車社会であることです。公共交通機関がどうしても乏しいため、基本的には車が必要になります。車の数と歩行者の数の差に最初は戸惑うかもしれませんが、また、市街地であってもまち歩きをする習慣がないため、そのようなイベントを開催しづらいことは課題だと感じています。

■田舎暮らしの良い点は何ですか？

田舎暮らしの良い点は、何とんでもない空気がきれいなことです。私はアトピー持ちなので、都会に比べると肌の調子が悪くなってしまうのですが、寄居町に来てからはそのような悩みが減りました。また、夜空に輝く星もとても美しく、自然本来の暗さを感じられる環境も快適です。

■松本隊員(以下、てっさん)はどんな方ですか？

てっさんは、形式上は同僚ということになりますが、私にとってはある種先生のような存在です。社会的な知識や経験が豊富で、いつもさまざまなことを教えていただいています。紳士的で穏やかで、ときどきお茶目な一面ものぞかせる、そんな方です。寄居町での生活や活動において、てっさんにはとても感謝しています。寄居町へ移住希望の方はぜひ一度、お会いしてみることをおすすめします！

■今後の寄居町に期待することは何ですか？

寄居町の「ゆるさ」という基本性質は、そのまま変わらないでほしいと思います。その中で、町民の方それぞれが自分のアイデアや夢を形にしていけるような環境を整え、より魅力的な町になるのではないかと思います。何かをしたいという気持ちを持つ人々が集まり、互いに支え合いながらゆとりと形を作っていく、そんなコミュニティが成熟されていくことを願っています。あとは、少し保守的な部分を取り払えると寄居町を利用したい人は増えるのではないかと思います。

■最後に一言お願いします。

無駄な無理をせず、自分の力で生きていける力を養い、多面的に成長していきたいと思っています。また、同じようにアートに情熱を持つ方々と一緒に活動できればうれしいです。作家仲間を募集中ですので、興味のある方はぜひご連絡ください。

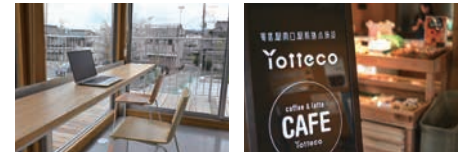


内川隊員作品

寄居駅南口駅前拠点施設 Yotteco



みんなの笑顔が「集う」、「憩う」、「交わる」まちなか回遊拠点となる複合施設として、昨年4月にオープンした寄居駅南口駅前拠点施設Yotteco。新たな町の顔として、さまざまな方にご利用いただいています。施設内には、公衆無線LAN (Wi-Fi) を完備し、1階は観光案内やカフェ、特産品の販売、2階は多目的スペースとして、待ち合わせや勉強、イベントなど多様な用途にご利用いただけます。



住所	寄居町大字寄居1231-11
開館時間	午前9時～午後6時 (観光案内所、物販コーナーは午後5時まで)
休館日	年末年始(12/29～1/3) ※点検のため、臨時休館する場合あり
問い合わせ先	048-580-7307
指定管理者	株式会社まちづくり寄居



聴かせて

Yotteco利用者の声!

Yottecoでは、毎月さまざまなイベントが開催されています。Yottecoのオープン当時から「手しごとマルシェ in Yotteco」を開催し、これまで計5回の開催、さらに12月14日⑤には、全25店舗が出店する「第6回手しごとマルシェ in Yotteco」の開催を予定している吉野さんにお話を伺いました。

PROFILE 吉野 美和子さん Yoshino Miwako

ハンドメイド作家。幼少期に寄居町へ引っ越し、現在は町内在住。ハンドメイドのイベント開催・参加を行う。



「小さい頃からハンドメイドは身近な存在で、時折作品を作っていました。娘の子ども服を作るようになってから、より多くの作品を作るようになりました」と語る吉野さん。Yottecoで開催された「手しごとマルシェ in Yotteco」では、多種多様なハンドメイド品が所狭しと並んでいました。全てが出展者による手作りで、ジャンルも多種多様。「生地を見るのが大好きなので、まず生地の柄からできあがり作品を想像して制作しています」と語ります。

元々作品を作ることが好きな吉野さんは、友人の勧めでハンドメイドのイベントに出店したところ、お客様に自身の作品を認めてもらえる喜びを知り、そこから本格的に制作、イベントの出店・主催するようになったとのこと。「以前から育った寄居町でハンドメイドのイベントを開催したいと考えていて、販売できる場所を探していたところ、Yottecoならイベントを開催できると知り、真っ先に問い合わせしました」と語ります。また、吉野さんは「1回目のイベントは17店舗で開催しました。寄居町でハンドメイドのイベントを開催したいという私の思いに賛同してくれた知り合いに声をかけ集まっていたきました。そこから2回、3回と Yotteco でイベントを開催するたびに、口コミが広がって、出店する方やお客さまも遠くから足を運んでくれるようになりました。皆さん手しごとマルシェじゃなくて Yotteco で覚えてくれているんです」と笑顔で話してくれました。

女性物の作品が多い中、男性が使用できる作品もあります。帽子やバッグ、アクセサリなど、男性も十分楽しめそうです。「イベントを開催してわかったことは、寄居町に作家さんが多くいること、手作りイベントに興味を持ってきている町民の方が多くいることです。今後はさまざまな関係団体を巻き込み、寄居で大きなハンドメイドのイベントを開催したいです」と熱く語っていただきました。

ハンドメイドは全てが1点物。同じものは1つとして存在せず、それぞれの作品に温かみがあり、作家の想いが込められています。言い換えれば“世界に一つだけの特別な逸品”。さて次回の開催ではどんな作品に出会えるのでしょうか、とても楽しみです。

編集後記

まちなか情報誌『あっLOOK』第6号を手にとっていただきありがとうございます。秋になるとたくさんの魅力がありますが、今回は、紅葉の紹介のほか、みかん園の組合長、日本の里風布館長、ハンドメイドイベントの主権者へ取材し、その方々の“想い”を伺うことができたことは、とても貴重な経験となりました。当町へ訪れたいと思っていただけるきっかけとなれば幸いです。発行にあたり、取材にご協力いただいた皆さまをはじめ、たくさんの方にご協力いただきました。この場を借りてお礼申し上げます。次回は春が始まるころに発行しますので、引き続き皆様のご協力をよろしくお願いいたします。

